続「鍼灸」は「効果」があるのか？

第5回 ヨーロッパ医学での鍼灸治療のあるべき位置

琉球治療院　関 忠雄

1.ヨーロッパ医学と鍼灸治療

たとえば膝関節もしくは腰などが痛むときに病院へ行ったとします。そうすると①外用薬（シップ薬）か鎮痛薬の処方、②注射による薬液の注入の治療が行われます。痛みが激しく①、②以上の治療を求める場合はペインクリニックで神経ブロックが行われます。

神経ブロックとは主として末梢神経（脳脊髄神経や交感神経節）に直接またはその近傍で局所麻酔薬、神経破壊を作用させたり、高周波熱凝固、パルス高周波通電を行うことにより一時的あるいは長期間にわたり神経機能を停止させ、痛みを軽減することを目的とした治療法です。

鍼灸治療は②の分野に属しますが薬液により神経組織の刺激を減弱させるのではなく、神経組織自体に刺激を与え回復させる点がヨーロッパ医学とは異なります。

鍼灸治療が悪性腫瘍に効果があると医学者にもてはやされる時期がありました。しかし鍼灸の原理が確立されていなかったために鍼灸治療の評価が低下して、そのすぐれた効果が現在でも医学者には認められていません。

一方で、「がんの補完代替療法クリニカル・エビデンス2016年版」によると鍼灸治療におけるエビデンスとして、以下のものを挙げています。

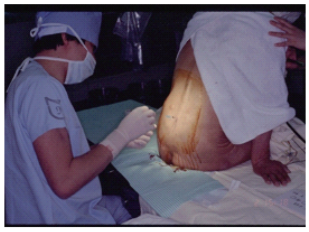
◎鍼灸治療は化学療法、抗がん剤副作用による嘔気嘔吐を軽減させる

◎鍼灸治療は全般的なQOL（生活の質）を改善する

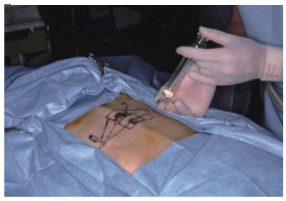
◎鍼灸治療は化学療法による骨髄抑制を軽減させる

写真1 ペインクリニックでの神経ブロック

頸部硬膜外ブロック


くも膜下フェノールブロック

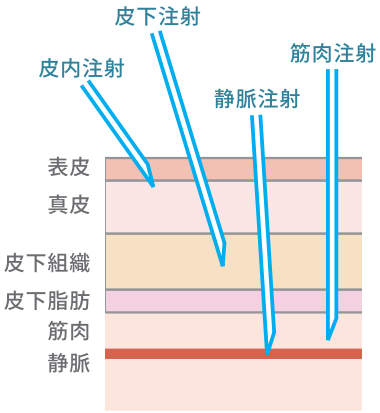
上顎神経ブロック


内臓神経ブロック

星状神経節ブロック

肋間神経ブロック

図1 皮下注射、筋肉注射などの薬液注入場所



関　忠雄　Tadao Seki

1949年　長野県生まれ
1973年　中央大学法学部卒業
1978年　早稲田鍼灸専門学校卒業／倉島宗二師に師事　臨床鍼灸学を研修
　　関鍼灸治療室を開設
2003年　新潟大学医学部第一解剖学教室で末梢神経（自律神経:迷走神経）解剖を研修
2005年　佐野動物病院にて獣医学を研修
2006年　名古屋市れもん鍼灸接骨院院長
2013年　アルゼンチン（F・バレイラ）鍼灸院院長
2018年　アルゼンチンから帰国
2019年　琉球治療院勤務

癌治療において主軸となるのは標準治療（手術、放射線治療、化学療法）ですが、化学療法の副作用や手術療法の術後疼痛などによりＱＯＬが低下してしまうデメリットを、鍼灸で補完することができます。また、鍼灸治療は体の免疫力を高める効果があることが分かり、自然免疫であるＮＫ細胞の活性化や、末梢血リンパ球の反応性変化の増加が研究により明らかになってきています。

2.ヨーロッパ医学と鍼治療の影響

ヨーロッパ医学は、古代エジプトや古代ギリシャの化学的手段を用いて卑金属から貴金属（特に金）を精錬しようと試みる錬金術が化学に影響を与え、現在の薬物療法へと変化してきています。鍼治療はこのような歴史的背景はなく、黄河流域の民族が行っていた古代医術の鍼治療が朝鮮に伝わり６４２年に紀幾男麿によって日本に伝来しました。灸治療はもう少し北のモンゴル高原とその周辺の民族の古代医術がインドに伝えられ仏教と一緒に日本に伝来しました。

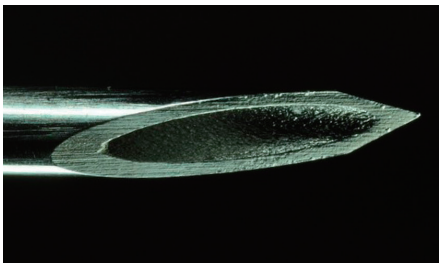
古くからの鍼治療と灸治療はヨーロッパ医学の医学的説明で新しい角度から見直す必要があります。特に鍼治療はヨーロッパ医学の薬物投与の手段である注射針と神経組織を刺激する鍼の形が似ているため、長く医学者に混同され誤解されてきました。このため鍼治療の多くの疾患への応用を妨げている現実があります。

3.鍼治療の鍼が注射針より細いという意味

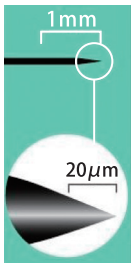
注射は17世紀に「血液は循環している」ことを発見したことがきっかけで、犬の静脈内に溶液を投与したことが始まりとされています。注射針は薬物の人体などへの注入という本来の目的からして筒状の形体を変えることができません。これに対し鍼治療の鍼は、神経組織を刺激するという目的からして形体の制約はありません。太さも０番鍼の鍼から10番鍼まで異なります。これは疾患治療の部位の不利益をなくすことができます。頸部への注射針の刺入はその太さから静脈を損傷する危険があるためにできませんが、鍼は細いために頸部の迷走神経に対しての刺激が可能です。

薬液の注入という目的とは別に神経組織そのものの刺激という治療手段は、現在のヨーロッパ医学で最も考えられていない治療手段と思われます。麻酔科のような専門的知識を必要とせず、古代より安全に使われてきた鍼治療を見直すことは皮下注射・筋肉注射にもう一つの治療手段の選択肢を加えるものと考えています。

写真２　注射針の先と鍼治療の鍼先



注射針



鍼

参考文献
日本緩和医療学会・緩和医療ガイドライン委員会編『がんの補完代替療法クリニカル・エビデンス２０１６年版』（２０１６、金原出版）